

平成 26 年度
大学教育再生加速プログラム



令和元年度事業報告書

新潟工科大学

-目次-

挨拶	1
I. 令和元年度「事業概要」と「事業計画」	2
1. 事業概要	2
2. 具体的な事業内容	2
3. 事業計画	3
II. 事業の成果	4
1. 学生マネジメントの確立に向けた取り組み	4
2. 教学マネジメントの確立に向けた取り組み	9
3. 達成度自己評価システムの運用の成果	11
4. 「企業が求める基礎学力到達度テスト」の実施と結果	11
5. 対話型企業技術・要素会	12
6. 高大接続について	19
7. 学修成果の可視化を教育改善につなげるためのFD・SD・FSD	21
8. IRの活用と今後の展開	23
9. 情報収集・発信	26
10. 定量的な数値目標の達成状況	28
11. AP組織の改編	30
III. 次年度に向けた計画と展望	31

挨拶

新潟工科大学長 大川 秀雄

開学以来、すでに卒業生及び大学院修了生の総数が 4,500 名を超え、その 7 割近くが県内企業に就職して活躍しております。産学交流会のご協力を得ながら、平均で 95%以上の高い就職率を維持し、特に平成 27 年度に初めて就職率 100%を達成して以来、本年度まで 5 年連続で 100%を達成することができました。これらの実績は、本学設立時に託された使命を、多くのご助力とご支援を賜りながら確実に果たしてきたことの表れと考えております。

建学の精神にありますように、本学は、未知の分野に果敢に挑戦する創造性豊かな技術者の育成を目指しております。これまでに、文部科学省「大学生の就学力育成推進事業」（平成 22～23 年度）や同「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」（平成 24～26 年度）などを通じて教育改革に積極的に取り組み、現代社会のニーズに適合した新たな工学教育システムの構築に教職員一体となって努力してきました。その結果、『産学協同科目』区分の、「キャリアデザインⅠ～Ⅲ」、「工学プロジェクト A～D」、「産業と大学」、「職業実習」という他大学では見られない特色ある正規授業科目群を教育課程に組み込むことができました。

この『産学協同科目』は、知識や技術を身につけるだけではなく、挑戦力、想像力、問題解決力、コミュニケーション力などの総合的能力の修得をも目指しています。これらの授業科目の特徴は、産業界との協働によって実施されている点です。「企業がつくったものづくり大学」である新潟工科大学ならではの意欲的な取り組みとして外部から高い評価を受けており、本学の教育ブランドとしての誇りでもあります。

文部科学省「高大接続改革推進事業」（旧「大学教育再生加速プログラム（AP 事業）」）は、本学が今、最も力を入れて推進している教育改善の取り組みです。「学修成果の可視化」を主要課題に飯野秋成教授をリーダーとする教育改革加速チームの牽引で平成 26 年度にスタートして以来、ルーブリックなどを含む達成度自己評価システム、企業が求める基礎学力到達度テストなどの整備が終わり、システムの定着に努めているところです。また、文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」で「高度シミュレーション技術による地域の『風』の課題解決と人材育成」が平成 29 年秋に採択されました。こちらは富永禎秀教授が中心となって活動していますが、研究ブランドとして、前述の教育ブランドとともに両輪となって大きく育ってほしいと願っています。最後に、大学経営の安定化を目指す「新潟工科大学 第三期中期経営計画」（3 年間）が平成 30 年度から始動いたしました。AP 事業も本年度を持ち終了となり、事業終了後、本事業の経験と実績を新潟県から採択を受けた「コトづくり実践教育を通じた地域中核技術者の育成と県内定着事業」において引継ぎ、新潟工科大学の教育ブランドを確立して参りたいと思います。

I. 令和元年度「事業概要」と「事業計画」

1. 事業概要

本年度は、AP 事業採択最終年度ということで、これまで取組んできた内容を実施するとともに、事業終了後も取組んできた様々な事業内容を継続し次の、展開につなげるための検討を行った。

これまで取組んできた内容として、①学修成果の可視化を実現させるため引続きラーニングポートフォリオシステムの運用を行った。②ルーブリック指標や企業が求める基礎学力到達度テストなどの可視化した学修成果を基に教員が学生との面談を行い、学びのループを回し、学生の主体的な学びにつなげる取り組みを行った。③企業の求める力を学生・教員にフィードバックし、産業界ニーズにもマッチした可視化システムの運用を図るとともに、可視化したデータを分析し、学生の学びと教学の2つの改善ループを回す取り組みを行った（詳細は、I. 2. 参照）。

さらに、④昨年度制定したアセスメント・ポリシーを実質化し、本学の定める3つのポリシーが適切有効に機能しているのか、また、本学の教育カリキュラムが機能しているのか、多面的、総合的に点検評価し必要に応じて改善に繋げる取り組みを行った。

事業内容の継続、展開のため、アセスメント・ポリシーに記載した実施責任部署に引継ぎを行った。

2. 具体的な事業内容

本年度は、前年度までの事業内容に加えて、アセスメント・ポリシーを策定し運用について検討を行った。さらに、シラバスがカリキュラム全体、科目間連携を意識したものとなるようにワークショップを開催して改善に取り組んだ。具体的な事業内容は以下のとおりである。

- ① 学内に教育改革加速チームと教育改革業務監査チームを設置し、事業の推進を図るとともに、チェック体制を強化した。
- ② 教育コーディネータと事務補佐員を配置し、システムの運用、本事業に係るFD、SD、FSDの企画などを推進し事業の運営を円滑に行った。
- ③ 学修成果を可視化するラーニングポートフォリオ「達成度自己評価システム」を運用し、学生の学びの改善ループと教学マネジメントの改善ループを回した。また、「達成度自己評価システム」を用いることによりPDCAを回し、改良を行った。
- ④ ルーブリックを活用した評価を行い、学生の学びの改善ループと教学マネジメントの改善ループを回した。
- ⑤ 学生の基礎学力等の伸長を図るため、「企業が求める基礎学力到達度テスト」ならびに新潟工科大学で定めた人間力を自己評価する「NIIT 人間力セルフチェック」を実施した。
- ⑥ 対話型企業技術・要素会を開催し、学生の自己評価と企業評価による可視化を実施した。可視化結果をラーニングポートフォリオに記録し、2つの改善ループを回した。
- ⑦ 学修成果の可視化の結果を基にIR分析を行い、FDおよびFSDを開催した。また、学生目線からの授業評価を調査するとともに、いくつかの科目において授業参観を行った。
- ⑧ 高大接続PBL実習について検討し、実施した。
- ⑨ 高大接続部会や卒業生教員との高大接続情報交換会の開催、特待生との特別プロジェクト研

究（デュアルシステム）の実施、入学前学習の実施などアドミッション・ポリシーに沿った高大接続の施策を行った。さらには、入学前の学修機会の単位認定について検討を行った。

- ⑩ 本事業の取り組み状況を発信するためホームページを更新し、取り組み状況を広く発信・周知した。また、リーフレットを作成し、本学の教育改革の取り組みについて周知を図った。
- ⑪ 昨年度に引き続き、他大学の先進事例を調査し、本学の可視化システム、さらには教育改革に反映させた。
- ⑫ 企業や学生に対し、求める学力や人間力について調査を実施し、学生の学びの改善ループと教学マネジメントの改善ループを回した。
- ⑬ 教育改革加速チームが今年度実施した内容についての報告を取りまとめ、教育改革業務監査チームならびに外部評価委員会の評価を受けた。また、事業評価のための学生インタビューと企業ヒアリングを実施した。

3. 事業計画

事業計画は、上述の具体的な事業内容に沿って以下のとおり計画した。

- ① 4月～3月 学内に教育改革加速チームと教育改革業務監査チームを設置し、事業実施のための推進体制とチェック体制を構築する。教育改革加速チームが中心となり教育改革加速会議を開催(原則月1回以上)する。また、教育改革業務監査チームによる業務監査を実施する。
- ② 4月～3月 教育コーディネータを配置する。また、事務職員を配置し教育コーディネータに委嘱する。
- ③ 4月～3月 ラーニングポートフォリオのシステムを運用する。
- ④ 4月～3月 ルーブリック指標の作成ならびに評価を行い、成果をラーニングポートフォリオのシステムに記録、共有する。
- ⑤ 4月～3月 基礎学力到達度テストおよび新潟工科大学人間力セルフチェックを実施し、個々の学力と学修成果を可視化する。
- ⑥ 11月 対話型企业技術・要素会を開催する。
- ⑦ 4月～3月 学修成果の可視化データ（IR）を分析し教育改善研修会（FD・SD・FSD）と授業参観を実施する。また、シラバスを検証する。
- ⑧ 4月～2月 高大接続PBL実習を実施する。
- ⑨ 4月～3月 アドミッション・ポリシーの見直しとアドミッション・ポリシーに沿った高大接続の施策を実施する。
- ⑩ 4月～3月 専用ホームページやリーフレットを活用し情報を発信する。
- ⑪ 6月、9月 ベンチマーキングを実施する。
- ⑫ 4月～3月 企業・学生に対し、取り組み成果に係る調査を実施する。
- ⑬ 10月、3月 成果報告書を作成し、業務監査チームによる評価ならびに外部評価委員会による評価を実施する。

本年度は、全学を挙げて上述の事業計画に沿って事業に取り組んだ。

Ⅱ．事業の成果

1．学生マネジメントの確立に向けた取り組み

(1) 企業が求める基礎学力到達度テスト

①概要

このテストは、これまで本学において基礎数理（1年生履修）のクラス分けに用いていたプレースメントテストに物理、英語の2科目を追加し、企業が求める汎用的な力としての基礎的な学力を計るものである。問題の難易度は、担当教員の意見や企業の現場において必要とされる分野について調査した結果に基づいたものとなっている。また、毎年行うことで入学時から卒業までの伸びを可視化し、学修計画に反映させるものになっている。

②取組内容・成果

工学科2、3、4年生を対象に、4月3日～7日に英語、数学、物理の3科目について行った（1年生はプレースメントテストとして、別途実施）。

結果は、達成度自己評価システムに折れ線グラフで示し（図1-1）視覚的に確認できることから、学生自らが身につけないといけない内容を強く認識させる形式となっている。今年度においても基礎学力の事後ケアを必要とする学生たちに向けたケアの方法について指針を定め、4月中旬に結果を返却する際、助言教員から学生へ指導を行った（詳細は、「(2) 面談による学びのアドバイス」の後半参照）。

③課題

学生が到達度テストをどの程度考慮し、当該学期の履修計画に反映させているかを把握できていない点、また問題が1～4年次まで同じため、学年毎に別の問題とするか等本事業終了後の引き継ぎ先部署の発展が期待される。

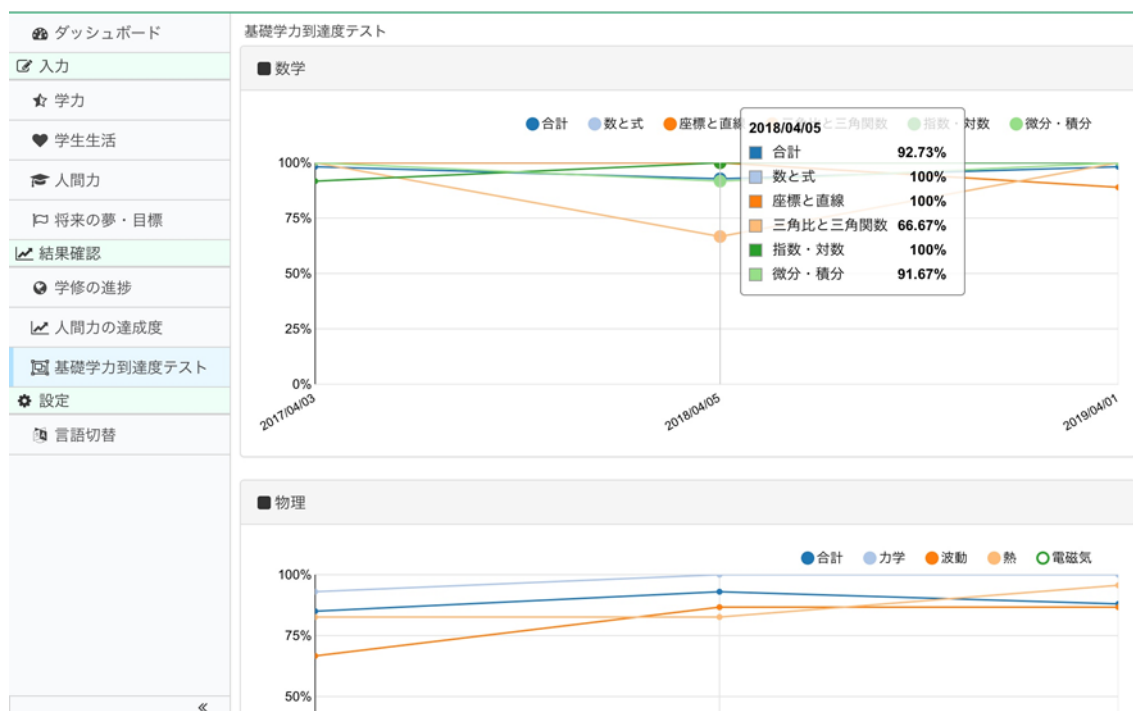


図 1-1 企業が求める基礎学力到達度テストの結果（サンプル）

（２） 面談による学びのアドバイス

①概要

面談による学びのアドバイスは、達成度自己評価システムに学生が半期の目標および振り返りを入力した後、工学ゼミの時間を利用して教員（助言教員と呼ばれる制度：教員が数名の学生の助言を行う制度）と学生との面談により、一人ひとりに合った学びへ誘うものであり、小規模大学の特徴を活かした本学ならではの取り組みである。

②取組内容・成果

今年度は、４回（前期：４月初旬、７月末、後期：９月末、１月末）実施した。内容としては、まずは学生が達成度自己評価システムへ前学期の振り返りを入力（図 1-2, 1-3, 1-4）させ、それを踏まえて半期の「夢・目標」を設定させた。次に、この入力結果を踏まえ、助言教員が学生グループとの面談によりアドバイスをを行った。面談時の指導内容については、例えば企業が求める基礎学力到達度テストの成績に応じたアドバイスを標準化するなどし、さらに教授会等で全教員に事前に周知徹底するようにした。

③課題

面談は数名の学生に対して教員が同時に実施しており、教員からは個々の学生に十分な指導ができないと声があがっている。これは、限られた授業の時間内のみで行うことに原因があり、今後別途時間を確保するなどの検討が必要であり、来年度以降に改善していく課題である。

ダッシュボード

入力

学力

学生生活

人間力

将来の夢・目標

結果確認

学修の進捗

人間力の達成度

基礎学力到達度テスト

設定

言語切替

進捗

ヘルプ

3年生 7月

回答する

A. 履修計画と履修状況

Q1 自身の将来や目標をふまえた授業科目を取れるよう履修計画を立てた。
☆☆☆☆

Q2 シラバス、履修モデルやカリキュラムマップ、企業で必要とされる力のアンケート結果を参考にして履修する科目を決めた。
☆☆☆☆

Q3 履修申告した授業科目はすべて履修した。
☆☆☆☆

B. 学習への取り組み

Q1 1日あたりの授業時間以外での学習時間を入力してください。

☆☆	30分未満
☆☆☆	30分以上1時間未満
☆☆☆☆	1時間以上2時間未満
☆☆☆☆☆	2時間以上3時間未満
☆☆☆☆☆☆	3時間以上

Q2 レポートなどの課題は、自分が書いた過去のレポートを振り返って書くように努力した。
☆☆☆☆

Q3 ルーブリック評価があるレポート・課題は、事前に評価項目・内容を見てから作成した。
☆☆☆☆

C. 資格に対する取り組み

Q1 資格取得や検定試験のための努力（情報収集、勉強）をした。
☆☆☆☆

図 1-2 学生生活振り返りの入力画面の例

AsM 新潟工科大学

進捗

4年生 2月の目標

Q1 4年間の学生生活で身につけたと感じるNMIT人能力(実践力・創造力・コミュニケーション力)は何でしょうか。

Q2 卒業研究で身につけた力を3つ以上書いてください。(例：探究力、忍耐力、解決力など)

Q3 大学で身につけた力(Q1・Q2)で卒業後、自身の「将来の夢・目標」(機上部の項目)を実現するために生かしたいものはどれですか。

Q4 以下の9つのなかから、力になったものを選んでください。(複数回答可)

- ☐ 1. 対話型企業技術・営業会
- ☐ 2. PBL実習
- ☐ 3. 資格取得支援
- ☐ 4. 再教育・再試験
- ☐ 5. 教育センター
- ☐ 6. スララ
- ☐ 7. エキスプロジェクト
- ☐ 8. 職業実習
- ☐ 9. 産業と大学

Q5 4年間の大学生活において以下の科目の中で、どれが身についたと感じますか。(複数回答可)

- ☐ 1. 英語
- ☐ 2. 数学
- ☐ 3. 物理

コメント

図 1-3 学生生活振り返り（4年2月）入力画面の例

進捗

将来の夢・目標

卒業研究委員会について

Q1 参加した学科は、どの学科ですか。(各学科の隣2文字で回答してください。例 機械 or 情報 など)

Q2 選んだ中で、関心をもった課題(テーマ)は何ですか。

Q3 Q2の理由は何ですか。

Q4 4月からの卒業研究で取り組んでいたテーマは何ですか。

Q5 就職で希望する業界と職種は何ですか。(例：建設会社で施工管理、製造会社で品質管理、情報通信会社でシステム開発(SE))

Q6 就職活動に向けて、キャリア・産学交流推進課や教員の先生に聞いておきたいことをいくつか挙げてください。

コメント

図 1-4 学生生活振り返り「夢・目標」入力画面の例

(3) ルーブリック評価

①概要

ルーブリック評価は、学習到達度を示す評価基準をその観点と尺度からなる表として示したものである。これにより数値になりにくい実験、論述レポートなどの学修成果を厳格に評価することが可能となる。また、評価結果をポートフォリオで共有化することによって、各節目で学修成果を確認でき、学生生活を通じた学修の伸長が学生個人とともに、教員も認識が可能となる。

②取組内容・成果

本学は、平成 27 年度より試験的に運用を開始し、まずは工学科の実験、実習、演習系科目を中心に検討した結果、工学ゼミと工学基礎実験でルーブリック評価を実施した。学生に事前にルーブリックを説明した後に課題を実施し、課題毎にルーブリックによって評価し、工学ゼミでは結果をその都度学生に示した。

昨年度、導入した通常の講義科目に対する成績評価基準、および評価（S, A, B, C, D）に対する達成度を自己評価システムに導入し、学生の自己評価と教員による評価の比較が可能になり、学生と教員相互にこれらの結果を基に改善できるようになった（図 1-5）。また、卒業研究の評価用ルーブリックを作成し、評価を行った。学生はこのルーブリックを見て卒業研究に努力し、教員は客観的な評価が可能になった。

③課題

卒業研究のルーブリックはすべてのコースで共通のものを用いたが、学生の所属するコースによってはある程度柔軟な対応をする必要があり、本年度はコースによってある程度の裁量を持たせて実施した。このような裁量が適切であるか、今後検討の必要がある。また、教員によっては、成績評価時に授業の到達目標毎の評価を入力していない科目もあり、この件に対する入力状況を向上させる必要があると考えている。

✓ 機械の要素と機構					
2016年 後期 / -					
到達目標	D	C	B	A	S
身の回りにある機械など用いられている様々な機構を理解できる。	到達目標を達成していない	到達目標を最低限達成している	到達目標をほぼ達成している	到達目標を十分に達成している	到達目標を十分に達成し、さらに関係する内容を自主的な学修で身につけている
“機構”の中に用いられているリンク、歯車、ベルト、カムなどの“機械要素”の種類と特徴が理解できる。	到達目標を達成していない	到達目標を最低限達成している	到達目標をほぼ達成している	到達目標を十分に達成している	到達目標を十分に達成し、さらに関係する内容を自主的な学修で身につけている
幾つかの“機械要素”を組み合わせ簡単な“機構”をデザインできる。	到達目標を達成していない	到達目標を最低限達成している	到達目標をほぼ達成している	到達目標を十分に達成している	到達目標を十分に達成し、さらに関係する内容を自主的な学修で身につけている

✓ 基礎数理II					
2016年 後期 / -					
到達目標	D	C	B	A	S
三角関数、指数関数、対数関数の導関数が求められる	到達目標を達成していない	到達目標を最低限達成している	到達目標をほぼ達成している	到達目標を十分に達成している	到達目標を十分に達成し、さらに関係する内容を自主

図 1-5 ルーブリックを用いた自己評価システムに入力画面の例

(4) NIIT 人間力セルフチェック

①概要

ジェネリックスキルや社会人基礎力に対応する「NIIT 人間力」について、その力を測定する「NIIT 人間力セルフチェック」(図 1-6) を、入学時から 4 年次まで自己評価システムに入力させる形で実施した。「NIIT 人間力」の内容は、挑戦力、創造力、コミュニケーション力の 3 つを大きな柱として、細項目毎の伸びの自己評価を求めるとともに、伸長させるきっかけ、エピソードをポートフォリオとして蓄積させていくものである。

②取組内容・成果

今年度は、昨年度に引き続き NIIT 人間力の全学年の変化を分析した(図 1-7)。その結果、進級とともに向上している力などを確認した。さらに、人間力評価は学生の自己評価によるものであるため、客観性の高い直接評価を用いた学生に成長を測定するために、従来 3 年生のみで行ってきた PROG テストを本年度から 1 年次にも実施した。PROG テストの結果(ジェネリックスキル)と本学の人間力の関係を検討し、その結果を用いて PROG テストの結果返却の際に解説を行うことで、1 年生の段階で PROG テストによるジェネリックスキルと本学人間力の関係を意識させるようにした。

③課題

年間複数回のワークショップを開催し、教員の理解促進、授業科目と NIIT 人間力育成の関係について意識の共有を図っているところである。さらに、カリキュラムチェックリストに沿った全科目と NIIT 人間力育成の関係を学生はどのように感じているかヒアリング等を行いたいと考えている。

挑戦力	高い目標に向かってチャレンジする行動力	Q1) 目標設定：達成する見込みのある目標(ゴールのイメージ)を自分で設定できる。 (※)	☐ そういえる ☐ ややそういえる ☐ ややそういえない ☐ そういえない
		Q2) 自己効力感/楽観的思考：自分ではできると自信をもち、ある程度やり方や結果の見通しが持てれば取り組んでいく。 (※)	☐ そういえる ☐ ややそういえる ☐ ややそういえない ☐ そういえない
		Q3) 主体的行動：任されたことは、細かな指示を仰がなくても、自分で判断しながら進めることができる。 (※)	☐ そういえる ☐ ややそういえる ☐ ややそういえない ☐ そういえない
		Q4) 行動を起こす：自分がやらなければいけないことは直ぐ実行する。 (※)	☐ そういえる ☐ ややそういえる ☐ ややそういえない ☐ そういえない
		Q5) シナリオ構築：経験のあることや具体的にイメージできることについて、実現の可能性の高い計画・手順を自分なりに立てることができる。 (※)	☐ そういえる ☐ ややそういえる ☐ ややそういえない ☐ そういえない
	失敗を恐れず、トライ&エラーの積み重ねと努力の精神	Q6) ストレスコーピング：失敗や強いプレッシャーで動揺したり落ち込んだりするが、長くは引きずらずに、次に進むことができる。 (※)	☐ そういえる ☐ ややそういえる ☐ ややそういえない ☐ そういえない
		Q7) 志望・一度始めたことは最後まであきらめずにやり抜く	☐ そういえる

図 1-6 人間力セルフチェック入力画面の例

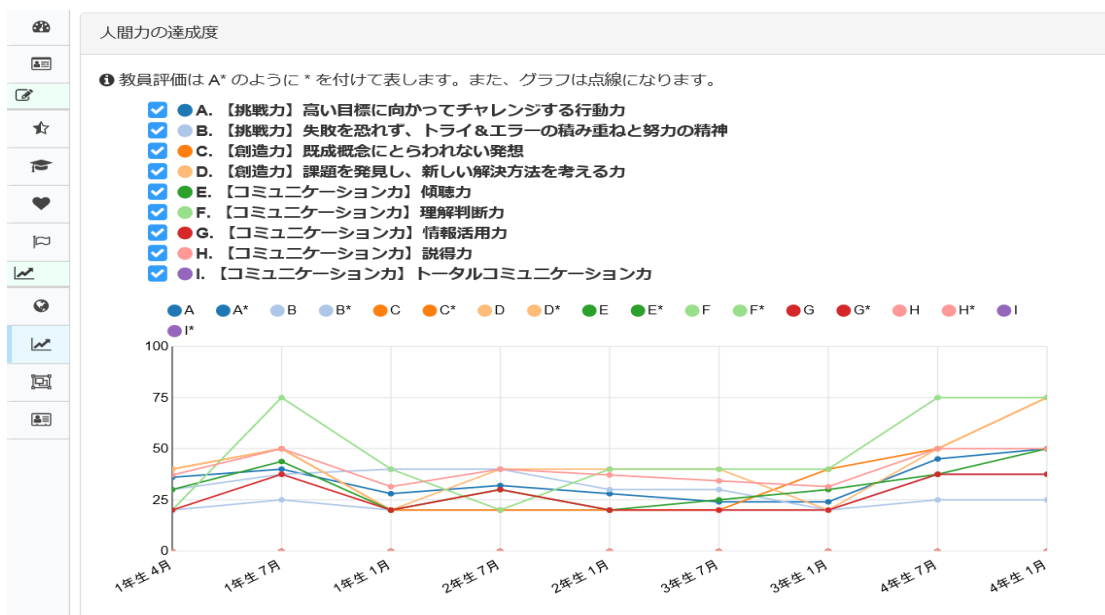


図 1-7 人間力セルフチェック結果（サンプル）

2. 教学マネジメントの確立に向けた取り組み

（1）概要

本学の FD は、個々の教職員の努力に基づいた授業改善を中心に行ってきた。この取り組みに加えて、IR（Institutional Research）を用いたさらなる教育改善を進めている。具体的にはカリキュラムマップ上の自己評価による到達度を可視化して、つまずき科目を発見し、つまずき科目の前後科目の到達目標などの検討を行うことで、組織的な FD につなげる取り組みを行っている。

昨年度より、本学で定める3つのポリシーが適切に機能しているかを多面的総合的に点検評価し、必要な改善につなげるためにアセスメント・ポリシーを設けた。本年度では、アセスメント・ポリシーをよりブラッシュアップし、実施責任者等を策定したリストを作成し本学の意思決定機関（学長含む経営戦略会議）に提出した。

（2）取組内容・成果

本年度は、IR に基づく分析結果を用いて、以下のような教職協働による全学の研修会やワークショップを行い、教学の改善を進めた。

- ・ 人材育成構想を可視化した「新潟工科大学モデル」を周知した(図 2-1)。
- ・ アセスメント・ポリシーについて教職員が理解を深め、成績評価基準、基礎学力、NIIT 人間力育成に関する授業での取り組みについての意見交換を行った。
- ・ シラバスがカリキュラムマップに適合し、カリキュラム全体を意識したものか、科目間連携を意識しているか検討し、教務学生員会の下部組織として科目体系検討部会を設置した。
- ・ FD・SD・FSD を実施、教職員の教育技術向上と認識の共有を図った。



図 2-1 これまでのワークショップで検討し作成した本学の人材育成構想

(3) 課題

昨年度より3つのポリシーが適切に運用されているかを各種指標で評価するためにアセスメントポリシーを検討し、ワークショップを通じて、教職員で共有を行った。アセスメントは非常に多岐にわたるため、本学で実施してきた既存の業務内容を整理、統轄する中で、アセスメントの業務割

振り及び負担を軽減する必要がある、本年度は見直しを計った。

ワークショップに参加した教職員は、教学の PDCA に対する理解を深めた。一方でワークショップを欠席した教職員に対する対応は十分でなかったため、欠席教員に対しては後日 DVD を閲覧等をお願いした。今後は、全学的なコンセンサスを得るべく、ワークショップなどを継続するだけでなく、欠席者を少なくするための取り組みが必要である。

3. 達成度自己評価システムの運用の成果

(1) 概要

平成 27 年度に試行運用を経て『達成度自己評価システム』は平成 28 年度から本格運用し、機能性及び操作性等の向上を図り年々バージョンアップを実施している。

このシステムは、本学が目指す挑戦力、創造力、コミュニケーション力を備えた「ものづくり」人材を育成するために、「学びの成果」を可視化することにより、入学から現在までの成長を実感すると共に、助言教員との面談を通して学生が自己の将来像を思い描き、その実現に向けた修学計画の立案を促す必須ツールとして活用できるものである。

(2) 取組内容・成果

本学の達成度自己評価システムは、ディプロマ・ポリシーとの関連性が以前より分かりやすく、使う側の声を反映してより使いやすくしている。

「達成度」は、人間力、企業が求める基礎学力到達度テスト、自己評価、成績など項目別にレーダーチャートやグラフで可視化している。そして、レーダーチャートによって自己評価と成績が総合的に対比され、ディプロマ・ポリシーのどの項目をどのくらい達成したのかが分かりやすく示される。自分がどの項目を得意とするのか、また、どの項目が不得意で克服する必要があるのか、学生自身がイメージできるようにしている。また、カリキュラムマップの中で、学生のレポート、企業との面談の自己評価など、様々な情報を常にアップロード、ダウンロードできる機能を追加し、ポートフォリオとして活用できるようにしている。さらに、将来の夢・目標を定期的にかかせて、担当教員とシステムを通じて意識を共有し、面談に活用している。

学生の達成度自己評価システムの利用率は、100%になるように努めた。さらに、教員側のプラットフォームとして、到達目標毎の成績を入力できるようにシステムを整備した。

(3) 課題

到達目標毎の成績入力をできるシステムを整備したが、その利用率が低い状況であり、今後検討が必要である。次年度以降、ディプロマサブリメント機能を追加する予定であるため、学生への活用方法の周知が課題となる。

4. 「企業が求める基礎学力到達度テスト」の実施と結果

(1) 概要

本学では、企業が求める人材を輩出するため、工学の基礎となる分野「数学」「物理」および「英語」の基礎学力に対する企業が求める基礎学力到達度テストを毎年実施し、1 年次から 4 年次までの学力変化を可視化している。毎年 4 月にテストを実施し、結果はポートフォリオとして蓄積され

4 年次まで継続して活用している。学生が在学中に身につけてほしい力として、企業が求める学力と人間力を試験結果と合わせて可視化することにより、学生が身につけなければならない基礎学力を強く認識できる仕組みとしている。

(2) 取組内容・成果

本年度に実施した内容は、大きく以下の 3 項目である。

- ① 工学で必要とされる基礎学力を本学の学生が多く就職する企業に、アンケート調査を行い、このアンケート結果を参考にし、作成した到達度試験（数学・物理・英語）を導入し 4 年目となった。
- ② 今年度の企業が求める基礎学力到達度テストの結果は、自己評価システムを通して、助言教員が確認できるようにしている。
- ③ これまでの企業が求める基礎学力到達度テストの結果と DP 達成度の関連性調査・分析を行った。この結果、学年進行で、一定程度の基礎学力が向上していることが分かった。

(3) 課題

基礎学力到達度テストの成績が悪い学生に対して、夏期・春期に基礎力養成講座を実施しているが、出席率が高くない講座がある。このため、この講座の出席率を向上させるための方策を今後検討する必要がある。

さらに、今後、基礎学力到達度テストを実施する部署の確定及び問題を企業が求めている基礎学力向上に合致しているかを常にモニタリングし、必要に応じて見直していくことが今後の課題となってくる。

5. 対話型企業技術・要素会

(1) 概要

令和元年度の対話型企業技術・要素会は、令和元年 11 月 20 日（水）に実施した。

この会の目的は、学生が主体となり興味ある企業のブースを訪問し、事業内容、企業技術などを聞くことより、その企業で活躍するために必要な力を知ることが目的として実施している。その力を自己評価することによって、自分に不足している力を知り、今後の履修計画を検討及び自己学習する際に役立てるものである。この会は従来から本学で取り組んできたものであるが、AP 事業採択後は、自分の力を可視化するためにヒアリングシートの作成、企業アンケートの実施と学生に集計結果を示すことにより、より適切に自分の学びにあった学修計画を検討できるようにしている。

(2) 取組内容・成果

学生は、企業のブースを訪問し会社説明、職務内容等を対話し、その結果をヒアリングシート（図 5-1）を作成し、このシートを用いて、学生は企業に就職した際に必要な「技術」・「知識」・「人間力」にまとめ、大学の講義や演習を通じてどの程度修学ができているか、どういった学修を計画すれば良いかといった、学びの改善ループを回すことに役立てている。昨年度までは、学生が記入したヒアリングシートを、事務が回収、助言教員に配布、助言教員から学生への指導時に学生に返却をしており、面談時まで学生がヒアリングシートに記入したことを忘れるなどがあり、活用が十分にできていなかった。昨年度まではヒアリングシートは紙媒体だけであったが、本年度より紙媒体

に加え、電子シートにでも記入してもらうことにした。

紙媒体のヒアリングシートは、対話型・企業技術要素会当日にメモ形式で書いてもらい、後日電子シートにも記入させることで、より意識の定着を図るためと、電子シートで記入した後にポートフォリオとして振り返り活動に活用でき、さらに助言教員が電子媒体だと閲覧しやすくなる利便性がある（図 5-3）。

参加企業に対し、企業が求める基礎学力・人間力を把握するためのアンケートを実施し、その結果を学生と教職員に示して、学生の学びや教育改善に活用している。基礎学力として設定していた工学分野で必須となる「数学」・「物理」に加え、グローバル社会への対応を視野に入れた「英語」の項目を盛り込んでいる。これらをアンケート(図 5-2)項目に取り入れ、今年度の基礎学力到達度テストの学生への結果通知の際にデータとして示している。

「平成 30 年度 対話型企業技術・要素会」ヒアリングシート 大学教育再生加速プログラム・AP 事業

学籍番号: _____ 氏名: _____ 2018 年 11 月 30 日

提出期限: 2018 年 12 月 7 日 (金) 提出先: 学務課

☐ 1 年生 ☐ 2 年生 (1.機械・素材 2.知能機械・情報通信 3.建築・都市環境) ☐ 3 年生 (1.先進製造 2.シミュレーション 3.化学バイオ 4.ロボティクス 5.情報通信 6.医療福祉工学 7.建築 8.都市環境エネルギー)

☐ 訪問した(話を聞いた)企業数 () 社

訪問した企業の中で、最も興味を持った企業について、ヒアリングしてみても良かったことを記入してください。

企業名:	主な業種:	主な職種:
------	-------	-------

1) 仕事の内容や特徴について
ヒアリングした企業の仕事内容や、特に特徴的な事柄について、具体的に記入してください。

2) 仕事に必要な技術について
仕事に携わる上で必要な「技術」について、箇条書きにして、具体的に記入してください。
例: 建築図面を読み取る技術

3) 仕事に必要な知識について
仕事に携わる上で必要な「知識(専門知識や一般教養の知識)」について、箇条書きにして、具体的に記入してください。
例: 施工管理に関する専門知識

4) 仕事に必要な「NIT 人間力」について
仕事を行う上で必要な「NIT 人間力(振戦力・創造力・コミュニケーション能力)」について、最も必要とされる能力 3 つに○をつけてください。

NIT 人間力	振戦力(アクション)	創造力(シンキング)	コミュニケーション力(チームワーク)	必要とされる能力	
				a	b
	a	高い目標に向かってチャレンジする行動力			
	b	失敗を恐れず、トライ＆エラーの繰り返しと努力の精神			
	c	現状認識にとらわれない発想			
	d	課題を発見し、新しい解決方法を考える力			
	e	想像力(相手の心を察することができる)			
	f	理解力(相手の話を理解し、判断できる)			
	g	情報活用能力(リサーチやインターネットを活用することができる)			
	h	読解力(説明スキルと知識をもつこと)			
i	トータルコミュニケーション力(顔笑、書き、対話すること)				

修学度自己評価シート 大学教育再生加速プログラム・AP 事業

今回の「対話型企業技術・要素会」を受けて、本学でのこれまでの学びを振り返ってみてください。工学科 1 年生は記入しなくて構いません。

1) 企業ヒアリングを行って、企業で求められる具体的な「技術」と、関連する「知識・演習等」は何か、具体的な「知識・演習」の欄に記入してください。また、現時点でどの程度修学できていますか。左のシート 2) を振り返りながら、五段階評価にそれぞれ一つ○をつけてください。

具体的な技術	知識・演習名	修学度・五段階評価
例: 設計製図の技術	設計製図の授業	1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5

1.よく理解・修得できている 2.ある程度理解・修得できている 3.どちらともいえない 4.あまり理解・修得できていない 5.全く理解・修得できていない

2) 企業ヒアリングを行って、企業で求められる具体的な「知識」と、関連する「知識・演習等」は何か、具体的な「知識・演習」の欄に記入してください。また、現時点でどの程度修学できていますか。左のシート 3) を振り返りながら、五段階評価にそれぞれ一つ○をつけてください。

具体的な知識	知識・演習名	修学度・五段階評価
例: 施工管理の知識	建築施工	1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5
		1 . 2 . 3 . 4 . 5

1.よく理解・修得できている 2.ある程度理解・修得できている 3.どちらともいえない 4.あまり理解・修得できていない 5.全く理解・修得できていない

3) 企業ヒアリングを行って、訪問後、仕事を行う上で最も必要な「NIT 人間力」3 つについて、どの程度身につけていますか、左のシート 4) を振り返りながら、五段階評価にそれぞれ一つ○をつけてください。

NIT 人間力(能力の左にある番号 3-1 を記入)	五段階評価
	1 . 2 . 3 . 4 . 5
	1 . 2 . 3 . 4 . 5
	1 . 2 . 3 . 4 . 5

1.よく身につけている 2.ある程度身につけている 3.どちらともいえない 4.あまり身につけていない 5.全く身につけていない

4) 自分の修学を振り返って、今後どのような学びを行っていきたいですか。具体的に記入してください。

<技術面>

<知識面>

<NIT 人間力など>

図 5-1 企業への聞き取り・学びのループを促すヒアリングシート

「平成30年度 対話型企業技術・要素会」参加企業アンケート

大学教育再生加速プログラム・AP事業
2018年11月30日

「対話型企業技術・要素会」参加企業各位

本ガイダンスにご参加いただき、誠にありがとうございました。

本学学生の修学に活かすため、お手数ですが、下記のアンケートにお答えください。

貴社名：	主な業種：	主な職種：
ご記入いただいた方の職種：	1. 技術系	2. 営業系
	3. 事務系	4. その他（ ）

<「対話型企業技術・要素会」全体に関して>

問1. プースの仕様に際して、いかがだったでしょうか。

1. 良かった・特に不満はない。 2. 良くなかった
良くなかった点、または改善点がありましたら、ご記入ください。

()

問2. 開催時間についてはいかがだったでしょうか。

1. 長い 2. 適切 3. 短い

問3. 「対話型企業技術・要素会」に参加して、満足度はいかがでしたか。

1. 良かった 2. 良くなかった

<訪問した学生について>

問1. プースに訪問した学生は何名でしたか。

名

問2. 学生の態度・印象はいかがでしたか？

意欲（貴社に対する就職しようとする意欲）	1. 高い 2. どちらともいえない 3. 低い
態度（質問の仕方、受け答えなど）	1. 良い 2. どちらともいえない 3. 悪い
積極性（進んで仕事に関する質問を行っていたか）	1. 高い 2. どちらともいえない 3. 低い
事前の企業リサーチ（貴社に関する情報をどの程度得ていたか）	1. 行っていた 2. どちらともいえない 3. 行っていなかった

<貴社（貴分野）への就職に際して、必要とされる能力について>

本学では、NIT 人間力（挑戦力、創造力、コミュニケーション能力）に関する能力の育成に努めております。

貴社（貴分野）に就職後、仕事に携わる上で必要な「人間力（挑戦力、創造力、コミュニケーション能力）」に関して、必要性が高い能力3つについて、1位から3位まで順位を記入してください。また、先ほどの能力3つに対して、新入社員が有している力を5段階で評価ください。

		必要性 (0位～3位)	新入社員が有する能力の評価
NIT 人間力	挑戦力（アクション）	高い目標に向かってチャレンジする行動力	1. 2. 3. 4. 5.
		失敗を恐れず、トライ＆エラーの繰り返しと努力の精神	1. 2. 3. 4. 5.
	創造力（シンキング）	既存概念にとらわれない発想	1. 2. 3. 4. 5.
		課題を見出し、新しい解決方法を考える力	1. 2. 3. 4. 5.
	コミュニケーション力 （チームワーク）	傾聴力（相手の話を聞くことができる）	1. 2. 3. 4. 5.
		理解力（相手の話を理解し、判断できる）	1. 2. 3. 4. 5.
		情報活用能力（パソコンやインターネットを活用することができる）	1. 2. 3. 4. 5.
		粘着力（説明スキルと知識をもつこと）	1. 2. 3. 4. 5.
	トータルコミュニケーション力（聴き、書き、判断すること）	1. 2. 3. 4. 5.	

5段階評価 : 1. 高い 2. やや高い 3. どちらともいえない 4. やや低い 5. 低い ※ 入社1～3年目の社員についてお答えください。

<学生に対して、専門分野の中で、特にしっかりと学んでほしい科目や知識、習得してほしい技術など>

大学生の内に、しっかりと身につけてほしい専門分野の科目や知識、技術がありましたら、お答えください。

<学生に対して、入社前までにしっかりと身につけてほしい学力（数学・物理・英語）について>

入社後、仕事に携わる際に、最低限身につけてほしい学力（数学・物理）に関して、下記から全てお答えください。

数学の知識・学力

☐ 基本的な方程式（一次方程式、二次方程式） ☐ 基本的な関数のグラフ（一次方程式、二次方程式、三次方程式）

☐ 基本的な定理と証明 ☐ 必要条件・十分条件

☐ 三角関数 ☐ 指数・対数 ☐ 複素数 ☐ 確率 ☐ 数列 ☐ 微分・積分

☐ 高次導関数 ☐ 偏微分方程式 ☐ 多変積分 ☐ ベクトル ☐ 行列 ☐ ベクトル解析

その他、具体的な数学の内容がありましたら、お答えください。

物理の知識・学力 ※特に必要な小項目の番号に、丸をつけてください。

☐ 力学 : ①力と運動 ②力学的エネルギー ③力積と運動量 ④剛体の運動

☐ 波動 : ①波の性質 ②音波 ③光波

☐ 熱 : ①熱容量と比熱 ②熱力学第1法則（熱、内部エネルギー、仕事） ③熱力学第2法則（熱機関）
④気体分子の運動（理想気体の状態方程式）

☐ 電磁気 : ①電界と電位 ②電流と磁界 ③電磁誘導 ④直流回路 ⑤交流回路

☐ 原子 : ①波動性と粒子性 ②原子の構造 ③原子核の崩壊と放射能

その他、具体的な物理の内容がありましたら、お答えください。

⇒裏面に続きます。（学力・英語）

図 5-2 企業が求める基礎学力アンケートシート

AP

バッジ

コンピテンシー

評価

一般

ヒアリングシート

開催済み説明会に関する資料（ダウンロード及び再配布を禁止します）

Home

ダッシュボード

カレンダー

プライベートファイル

マイコース

AP

Home / マイコース / AP / ヒアリングシート / 令和元年度対話型企業要素会（2019/11/20(水)）ヒアリングシート / アンケートに答える...

令和元年度 「対話型企業技術・要素会」ヒアリングシート

Q1. 訪問した（話を聞いた）企業は何社ですか？

☐ 1社
☐ 2社
☐ 3社
☐ 4社
☐ 5社以上

以下は、訪問した企業の中で、最も興味を持った企業1社について教えてください。

Q2. ヒアリングした企業の仕事内容や特徴について、具体的に記入してください。

Q3. 仕事に必要な技術について

仕事に携わる上で必要な「技術」とそれに対する本学の学び（科目名とあなたの習熟度の5段階評価）を記入例の書式で入力してください。

【入力書式】

科目名: 電気通信技術 / 評価: 5 / 科目名: 電気通信技術 / 評価: 5

図 5-3 学生ヒアリングシート（電子版）

過去 4 年間の対話型企業技術・要素会の実施状況を表 5-1 に、本年度の実施の様子を写真 5-1 と写真 5-2 に示す。

表 5-1 過去 4 年間の対話型企業技術・要素会の実施状況

会の名称	開催日	参加企業の概要
H26年度企業技術・要素会	2015. 2. 6 (金)	参加企業: 37社 製造業 (20社)、情報通信・電気通信業 (5社)、建設業・建設コンサルタント業 (17社)
H27年度企業技術・要素会	2016. 1. 13 (水)	参加企業: 40社 製造業 (23社)、情報通信・電気通信業 (5社)、建設業 (9社)、その他 (2社)
H28年度企業技術・要素会	2017. 1. 11 (水)	参加企業: 42社 製造業 (26社)、情報通信・電気通信業 (4社)、建設業 (9社)、その他 (3社) 参加学生数: 230名
H29年度企業技術・要素会	2017. 11. 22 (水)	参加企業: 44社 製造業 (29社)、情報通信・電気通信業 (3社)、建設業 (10社)、その他 (1社) 参加学生数: 213名
H30年度企業技術・要素会	2018. 11. 21 (水)	参加企業: 44社 製造業 (31社)、情報通信・電気通信業 (4社)、建設業 (7社)、その他 (2社) 参加学生数: 302名
R1年度企業技術・要素会	2019. 11. 20 (水)	参加企業: 44社 製造業 (30社)、情報通信・電気通信業 (5社)、建設業 (7社)、その他 (2社) 参加学生数: 305名

対話型・企業技術要素会への参加・協力企業は例年 40 社前後であるが、本学での取り組みが企業側に認知されてきており、参加・協力企業は増加傾向にある。一方、参加学生の出席率は、就活前の 3 年生は例年 8 割程度と高いが、それ以外の学年の学生は低い状況にあった。学生にとって早い学年次より参加することが重要であるとの認識から、昨年度と同様に例年の開催日から変更し、さらに 1、2 年生は、工学ゼミの一環として授業の中で参加させる取り組みを行った。その結果昨年度より参加学生数は 300 人以上となり、それまで 200 人前後だったものが大幅に改善した。



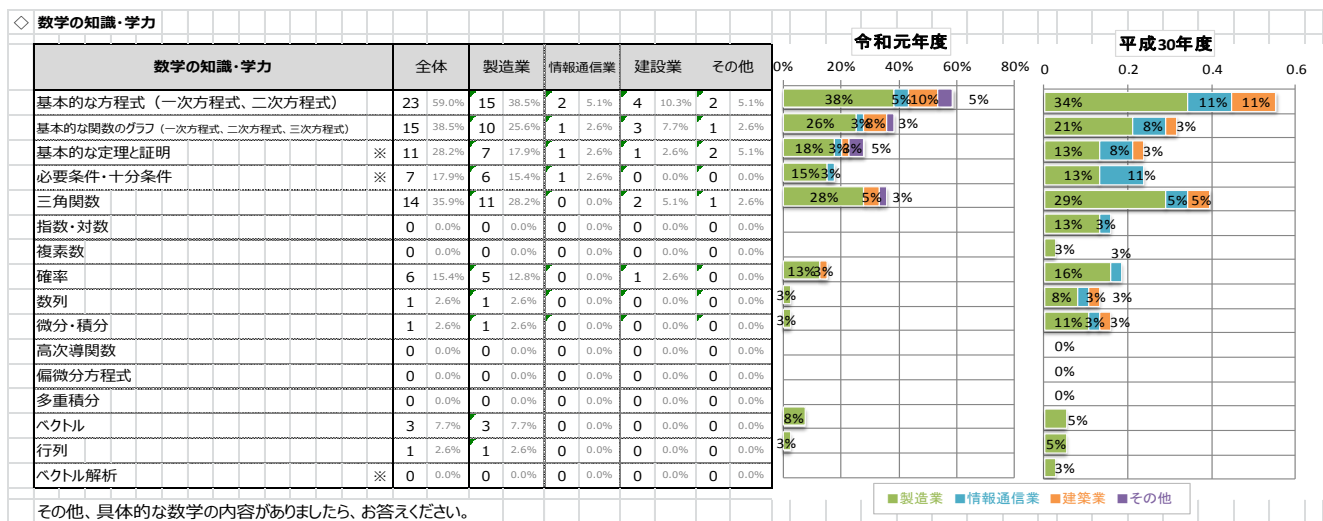
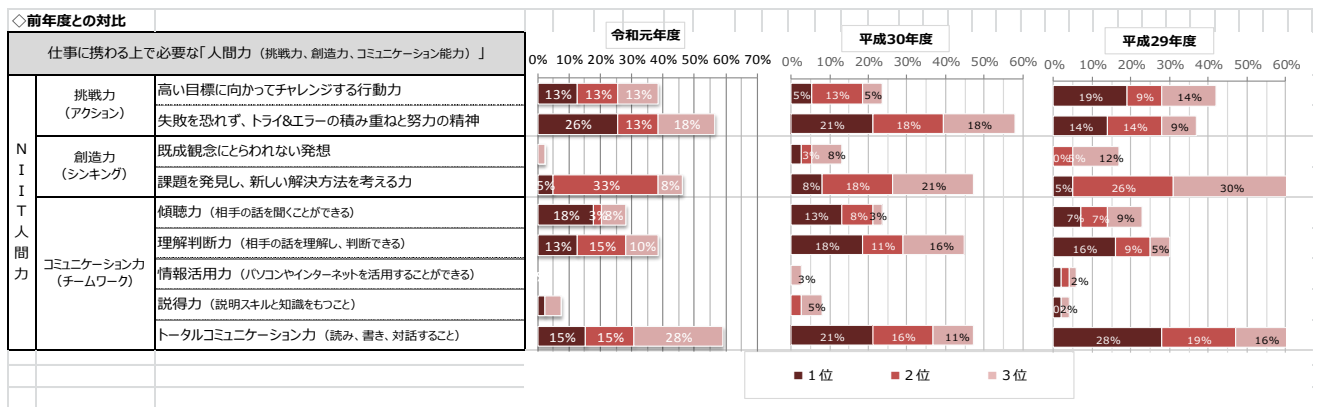
写真 5-1 R1 年度企業技術・要素会会場の様子



写真 5-2 R1 年度学生と企業との対話

企業アンケートの集計結果を表 5-2 に示す。これまで得られた 5 カ年分のデータを検証すると、次のような傾向がみられる。企業が求める「人間力」の全体的な傾向は、「高い目標に向かってチャレンジする行動力(挑戦力)」、「失敗を恐れず、トライ&エラーの積み重ねと努力の精神(挑戦力)」、「傾聴力(相手の話を聞くことができる)」、「トータルコミュニケーション能力(コミュニケーション能力)」、「理解判断力(コミュニケーション能力)」がほぼ同等の割合で重要視されている。「数学」では、基本的な方程式、関数の他、特に工学分野では幅広く利用される三角関数に関する理解が求められている。「物理」では、力学に関する分野が最も重要視され、次いで、「熱」、「電磁気」の順となっている。「英語」では、「仕様書を読む機会」や「英文 E メールを書く機会」「新しい技術を読み解く際に必要」等があげられ、少なからず英語力を必要とする企業がある事が示される結果となった。

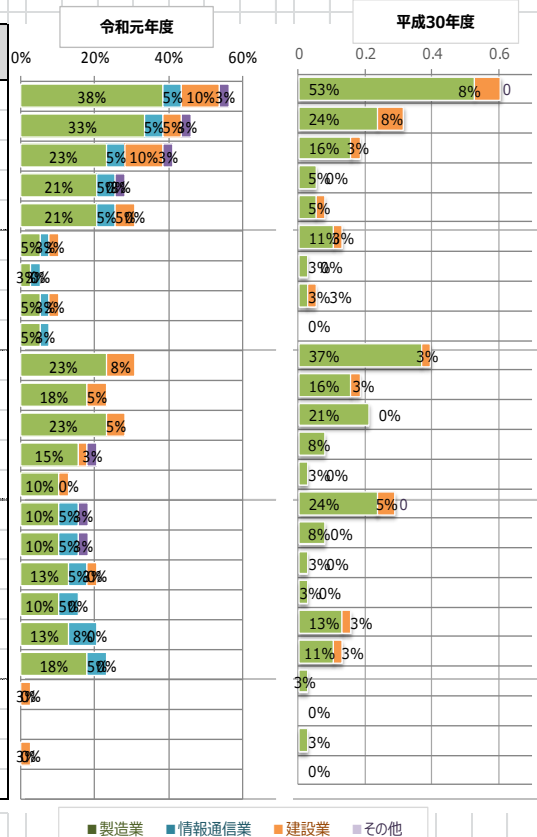
表 5-2 企業で必要とされる人間力と基礎学力（企業アンケートの結果より）



◇ 物理の知識・学力

※特に必要な小項目（①～⑤）の番号に、丸をつけてください。

物理の知識・学力	全体	製造業	情報通信業	建設業	その他
力学	22 56.4%	15 38.5%	2 5.1%	4 10.3%	1 2.6%
①力と運動	18 46.2%	13 33.3%	2 5.1%	2 5.1%	1 2.6%
②力学的エネルギー	16 41.0%	9 23.1%	2 5.1%	4 10.3%	1 2.6%
③力積と運動量	13 33.3%	8 20.5%	2 5.1%	0 0.0%	1 2.6%
④剛体の運動	12 30.8%	8 20.5%	2 5.1%	2 5.1%	0 0.0%
波動	4 10.3%	2 5.1%	1 2.6%	1 2.6%	0 0.0%
①波の性質	2 5.1%	1 2.6%	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%
②音波	4 10.3%	2 5.1%	1 2.6%	1 2.6%	0 0.0%
③光波	3 7.7%	2 5.1%	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%
熱	12 30.8%	9 23.1%	0 0.0%	3 7.7%	0 0.0%
①熱容量と比熱	9 23.1%	7 17.9%	0 0.0%	2 5.1%	0 0.0%
②熱力学第1法則（熱、内部エネルギー、仕事）	11 28.2%	9 23.1%	0 0.0%	2 5.1%	0 0.0%
③熱力学第2法則（熱機関）	8 20.5%	6 15.4%	0 0.0%	1 2.6%	1 2.6%
④気体分子の運動（理想気体の状態方程式）	5 12.8%	4 10.3%	0 0.0%	1 2.6%	0 0.0%
電磁気	7 17.9%	4 10.3%	2 5.1%	0 0.0%	1 2.6%
①電界と電位	7 17.9%	4 10.3%	2 5.1%	0 0.0%	1 2.6%
②電流と磁界	8 20.5%	5 12.8%	2 5.1%	1 2.6%	0 0.0%
③電磁誘導	6 15.4%	4 10.3%	2 5.1%	0 0.0%	0 0.0%
④直流回路	8 20.5%	5 12.8%	3 7.7%	0 0.0%	0 0.0%
⑤交流回路	9 23.1%	7 17.9%	2 5.1%	0 0.0%	0 0.0%
原子	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.6%	0 0.0%
①波動性と粒子性	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
②原子の構造	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.6%	0 0.0%
③原子核の崩壊と放射能	## ###	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%

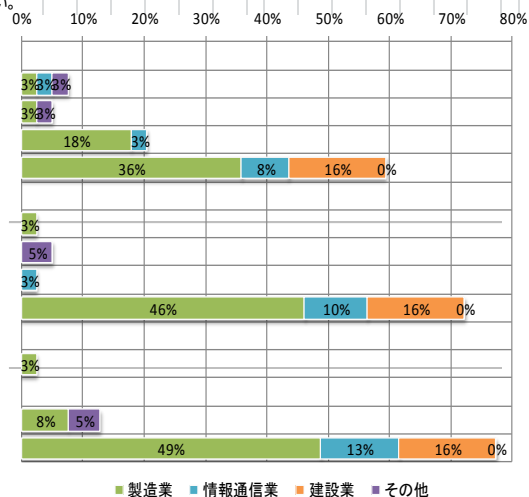


◇ 英語に関する学力

（1）貴社の中で、英語を使用する機会や頻度についてお尋ねします。

下記の各項目について、使用頻度を1つお選びください。また、使用するシチュエーションをご記入ください。

英語を使用する機会や頻度	全体	製造業	情報通信業	建設業	その他
読む機会（Reading）					
1 日常的に	3 7.7%	1 2.6%	1 2.6%	0 0.0%	1 2.6%
2 月に数回程度	2 5.1%	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.6%
3 年に数回程度	8 20.5%	7 17.9%	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%
4 殆どない	23 59.0%	14 35.9%	3 7.7%	6 15.8%	0 0.0%
書く機会（Writing）					
1 日常的に	1 2.6%	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
2 月に数回程度	2 5.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 5.1%
3 年に数回程度	5 12.8%	0 0.0%	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%
4 殆どない	28 71.8%	18 46.2%	4 10.3%	6 15.8%	0 0.0%
話す機会（Speaking）					
1 日常的に	1 2.6%	1 2.6%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
2 月に数回程度	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
3 年に数回程度	5 12.8%	3 7.7%	0 0.0%	0 0.0%	2 5.1%
4 殆どない	30 76.9%	19 48.7%	5 12.8%	6 15.8%	0 0.0%



参加した企業の業種の偏りにも関係してくるが、学生が将来希望している分野に応じて、こうした基礎学力の必要性を提示しながら、4年間での学力の維持や、卒業する際の学力の質保証へと繋げる有用なデータとして、今後の活用方法を検討していきたい。また、学生たちの各企業からのヒ

アリングシート（図 5-1）は、今後の本学での学びを自身でどうしていくべきか、学生たちそれぞれがじっくり考える材料となり、一旦助言教員に集められ、学生一人一人に「助言教員との面談」において、“教員からの言葉”とともに返却される。そして、今後の学修計画やキャリアプランを策定する材料として有効活用されることになる。

（3）課題

昨年度の対話型企業技術・要素会の1年生の参加率は4割程度であり、この原因について検討を行った結果、1年生に対する事前指導（授業の一環であることの周知、開催時間の周知など）が十分でなかったことに原因があることが分かった。そのため、本年度より周知を工学ゼミで行うこと、さらに参加することでどのような利点、具体的には自分が希望する職種または企業に就職するには現在からどのような力を身に付けておく必要があるのかをレクチャーした。結果として1年生の参加率は昨年度から1割増加の5割であったので今後は、さらに周知の工夫等含め改善できればと思う。

6. 高大接続について

（1）概要

本学は、大学教育の質保証を実現するため、高大連携事業を実施してきた。本事業は高大接続改革の趣旨を鑑み、これまで取り組んできた本学の高大連携事業を拡大、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく教育内容等を踏まえ、どのように入学者を受け入れるかを定める基本的な方針：アドミッション・ポリシーの検討、そして、大学入学前に様々な取り組みを行うことによって、入学後の円滑な学びに結びつける取り組みを行うことにしている。今年度は、高大接続プログラムの具体的な内容の検討・策定を行うとともに高等学校等からの情報収集・意見交換をもとに、実施可能なものを実施してきた。

（2）取組内容・成果

本年度実施した高大連携事業の各種取り組み概要を以下に示す。

① PBL 型インターンシップおよび PBL 実習の実施

本年度は、昨年度に引き続き上越総合技術高校の課題研究支援の中で PBL 型インターンシップを行った。日程は以下のとおりである。

対象：機械工学科3年生

訪問回：(1)6/14（金） 担当教員：佐藤栄一教授

(2)6/21（金） 担当教員：佐藤栄一教授

(3)7/4（木） 担当教員：五十嵐賢次准教授

(4)8/29（木） 担当教員：五十嵐賢次准教授

(5)1/16（木） 担当教員：五十嵐賢次准教授

② 高大接続部会開催

高大接続事業においては、高等学校との情報交換は重要である。そこで、10月24日に新潟県高

等学校長協会工業部会 7 校が参加して、高大連携に係る情報交換会を実施した。この交換会では、本学での学生の学びなどについて紹介が行われ、高校側から高校と大学の学びについて様々な意見を頂いた。また本学が所在する地元の柏崎工業高校とは、さらに個別の情報交換を目的とした高大連携協議会を実施した。

③ 高校生向け企業との面談会の実施

大学入学前の段階で、自分が将来活躍したい職業をある程度絞り、そしてその分野で活躍するために必要な力を知ることは大学生生活を円滑にするうえでも必要である。昨年度までは、本学教職員引率のもと、企業ブースを訪問し、企業が求める技術力や人間力を参加した生徒達が直接ヒアリングし、ヒアリング結果に基づき、入学後の目指すべき夢（業種）を決め、その夢を実現するために必要な大学での学びについて見出すことを目的にしていた。本年度も、本学に入学が決まっている高校 3 年生に対して本学主催の学内合同会社説明会に参加してもらう予定とし、申込数 17 名であり昨年度より若干名上回っていたが、新型コロナウイルス流行に鑑み中止となった。

④ 卒業生教員との高大接続情報交換会の開催

本学を卒業し高等学校の教員に従事している方に、高校現場のニーズと本学のカリキュラムとのかい離等に関する意見を聞くために、3 月にアンケートを実施した。アンケート内容は、本学の高大接続の取り組みについての意見を高校教員として立場から回答してもらい、アンケート結果は、今後の本事業終了後の高大接続の参考にする。

卒業生（教員）アンケート

本学ではいくつかの高大接続を実施してきました。忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

***必須**

1. 入学予定の高校生を対象に、合同会社説明会において企業と面談し、自身の学習計画立案に役立ててもらうことを目的として実施しております。高校生向け企業との面談会は、入学予定の高校生にとって役に立つものと思われますか。*

☐ 思う

☐ 思わない

2. 1. の理由をお聞かせください。「思わない」とお答えの方は、どのような点を改善すれば良いかお答えください。

回答を入力

3. 本学では入学前学習として、大学初年次に取り組むレベルのスクーリングを実施しております。入学予定の高校生にとって良いと思われますか。

☐ 思う

☐ 思わない

4. 3. の理由をお聞かせください。「思わない」とお答えの方は、どのような点を改善すれば良いかお答えください。

回答を入力

5. 本学では入学前の学習機会の単位認定を行っております。平成31年度は夏期集中講座として「三次元バーチャル造形基礎」（飯野秋成教授担当）を開講しました。高校生にとって、このような単位認定の機会は、高校生にとって興味関心を

図 6-1 卒業生（教員）アンケート 入力フォーム

⑤ 入学前学習の実施

文部科学省が指摘する高校教育と大学教育のギャップを埋める取り組みとして、従来の講話やグループワークに加え、平成 29 年度からアクティブラーニングを導入した。具体的には 10 月と 12 月に、教育センターが中心となり、AO および推薦入学合格（手続）者に対して、大学初年次に取り

組むレベルのスクーリングを実施した。

⑥ 入学前の学習機会の単位認定の検討

高校生を対象に、入学後に単位が認定される授業を開講することにより、大学教育の理解（＝高大接続の円滑化）と本学への進学意欲の醸成を目的としたものである。工学科は平成 30 年度に完成を迎えるために、教育課程の変更が可能になる平成 31 年度に向けて、他大学の入学前単位認定状況の調査、本学での入学前単位認定科目として実施した。その結果平成 31 年年度に入学前単位認定のために新規科目：三次元バーチャル造形基礎を開講することになり、シラバスの検討、高校生への広報の方法検討、実施方法について検討を行い、関係する本学規定の整備を行った。



写真 6-1 三次元バーチャル造形基礎 講義風景

（３）課題

高大接続事業は、入試や入学前学習を通じてアドミッション・ポリシーを満たす学生を入学させることに重きを置いている。対象者が高校生であることから、高等学校の授業がない時に高大接続事業を行うことが非常に多い。このため、スケジュールの調整が非常に難しく、高校生などの参加者数が少ない取り組みもあった。次年度は高等学校と連絡を密にして年間行事を十分に把握しながら計画すること、さらには高等学校に本事業の有用性を十分に説明し、高等学校と連携しながら今後も事業を推進できればと考える。

7. 学修成果の可視化を教育改善につなげるための FD・SD・FSD

（１）概要

学習成果の可視化を用いた教育改善、教学マネジメントを確立するために、本学 FD 委員会と連携しながらワークショップ形式の研修会を実施した。本年度は、IR に基づく教育の質保証のための教学の PDCA サイクル確立を目指すために、系統的な内容で 4 回の研修会を実施した。その結果、3 ポリシーと人材育成構想、科目間連携の強化、IR を用いた中退予防など、教育改善や教学マネジメントに対する様々な取り組みを行う土台が整備された。また、教員の授業スキル向上のために、FD 委員会と共同で公開授業を行った。

（２）取組内容・成果

今年度は FD（FSD）研修会を 6 月 27 日、9 月 9 日、10 月 16 日、12 月 18 日に実施、SD を 8

月 5 日に実施した。



写真 7-1 ワークショップ研修会の様子



写真 7-2 ワークショップ研修会の様子

【FD（FSD）研修会】

第 1 回目

日 付：2019.6.27 学内ワークショップ(FD 委員会共催)

テーマ：「学びのための e ポートフォリオとディプロマサプリメント」

ご講演者：東京学芸大学 森本康彦教授

第 2 回目

日 付：2019.9.9 学内ワークショップ(FD 委員会共催)

テーマ：学習支援体制の充実方策検討ワークショップ

～学科がチームとして学生を育てあげるために～

ファシリテーター：株式会社学びと成長しくみデザイン研究所 代表取締役 桑木 康宏 氏

第 3 回目

日 付：2019.10.16 学内ワークショップ (FD 委員会共催)

テーマ:カリキュラムアセスメントワークショップ

～学科がチームとして学生を育てあげるために～

ファシリテーター：株式会社学びと成長しくみデザイン研究所 代表取締役 桑木 康宏 氏

第 4 回目

日 付：2019.12.18 学内ワークショップ (FD 委員会共催)

テーマ：カリキュラムアセスメントワークショップ

～学科がチームとして学生を育てあげるために～

ファシリテーター：株式会社学びと成長しくみデザイン研究所 代表取締役 桑木 康宏 氏

【SD 研修会】

日 時：2019.8.5 SD 研修会

テーマ： 学生インタビューの結果報告

～学生の成長実感の共有と外部への伝え方の工夫～

ファシリテーター：株式会社学びと成長しくみデザイン研究所 代表取締役 桑木 康宏 氏

これらの研修会を通じて、IR と 3 ポリシーを基軸にした教育改善手法を確立し、カリキュラムアセスメント構築など教学の PDCA を回すことができた。その結果、人間力育成の難しさを再認識し、大学全体で人間力を育成する必要性について理解を得ることができた。

また、SD研修では、これまでの AP 事業を通して視えてきた本学の学生の実像を事務職員と共有することができ、今後の入試広報に活用でき、事務職員の教学 PDCA に関する関与の必要性を実感した。



写真 7-3 ワークショップ研修会の様子

(3) 課題

本年度 AP 事業で計画した FD 研修会は、4 回と昨年度 2 回と比べ、増加した。若干の欠席者もあり、欠席者には昨年同様に当日の研修会を DVD にして後日閲覧する対応を行った。この閲覧によって欠席者であってもある程度研修会の内容を理解することが出来たと思われる。

8. IR の活用と今後の展開

(1) 概要

個々の教職員の不断の努力が期待される、教員の授業改善の取り組み、および職員の業務改善の取り組みについては、結果的に、学生の学びを多角的に可視化している学内のあらゆるデータに、日々反映されている。本学では、開学時から本学に蓄積されてきた学生の学びに関する情報を IR データと位置づけ、その分析手法を確立することにより、教職員の限られた資源を有効に活用するための方策の立案に生かす仕組みを構築する。

特に、達成度自己評価システムに定期的に入力される学生の学びの自己評価に関するデータは、半期毎の科目の成績データ、企業が求める基礎学力到達度テストの得点データ、あるいは出席記録のデータなどと結びつけることにより、学びのつまずきの原因追及や中退の未然防止など、教学マネジメントの中核となる検討項目に対する効果が今後の分析次第で期待される。

（２） 取組内容・成果

本年度は、以下の①および②に掲げた２つの観点からデータ分析を試みることによって、授業改善や業務改善に有用と考えられる情報の抽出を行い、学内教職員に対する研修会とワークショップで周知徹底を図った。

① 優秀層及び中間層の学生に関するデータ分析

昨年度以前において、中退や留年に関するデータ分析を実施してきたが、優秀層及び中間層の学生に関するデータ収集がなかったため、本年度はこれを実施した。該当学生に面談をし、現在のカリキュラムをどのように評価しているかを把握するとともに、受験に際してどのようなタイミングで、どのようなリソースを通じて本学を認知し、最終的にいかなる経緯を辿り入学する決断をしたのか、その決定経路を把握することを目的に実施した。

②カリキュラムマップ上に連続する授業科目における学生の自己評価結果に関するデータ分析

ワークショップにおいて、本学の人材育成構想に照らしたカリキュラムマップの全学的な精査をするための資料として、全学でデータを共有した。いくつかの科目において、学生の自己評価が毎年低めとなる授業科目が明瞭に特定された。授業担当教員の個人的な授業改善への期待で終わらず、前後の授業科目の教授法や内容に踏み込んだ積極的な議論を誘発することができた。

（３） 課題

IR データ分析結果を踏まえたワークショップの開催は今年度が初めてであり、その効果を教職員で体感できた。データ分析そのものは高い分析のノウハウを持つ業者に委託する部分が大きかったため、学内におけるデータ分析のノウハウの蓄積とそのための学内体制の確立は、今後進めるべき課題である。また、今年度は、教職員の意識改革と周知徹底という意味で研修会やワークショップを数多く開催した。AP 事業終了後は、提供された IR データに基づいて適切に情報を読み取ることができ、授業改善の方策 PDCA を自ら進められる教員の数を増やしていくことが課題となる。

９．情報発信・収集

A. テーマⅡ「学修成果の可視化」採択校連携 大学教育再生加速プログラム（AP） 成果報告会「学修成果の可視化は大学教育をどのように変えたか」シンポジウム

（１） 概要

「大学教育再生加速プログラム テーマⅡ」の採択校、本学を含む８校によるシンポジウム「学修成果の可視化は大学教育をどのように変えたか」に成果報告で参加した。

（２） 取組内容・成果

２月１４日開催のテーマⅡ合同シンポジウムで、本学は成果報告を飯野秋成チーム長が担当した。「『NIIT 達成度自己評価システム』の活用による学生および教学の PDCA サイクルの構築」と題してこれまでの取り組みを発表した（写真 9-1）。企業と連携した本学の学修成果の可視化の取り組みについて情報発信をすることができた。



写真 9-1 飯野秋成チーム長発表の様子（写真提供：北九州市立大学 AP 推進室より）

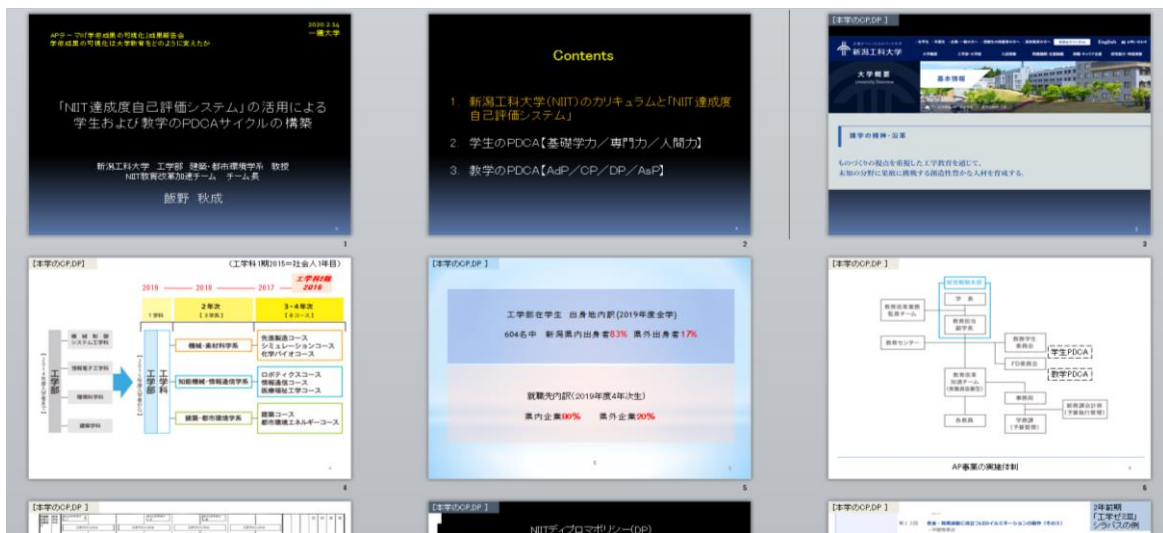


図 9-1 飯野秋成チーム長発表スライド

（3）課題

AP 事業終了年度であり、同じテーマ採択校の取り組み内容及び今後の事業引継等を学ばせてもらい、本学が抱える課題に対し、大変参考となるものであり、本学の取り組みをさらに加速させる必要を感じた。

B. ニュースレターの発行等

(1) 概要

本学 AP 事業の活動状況を、ニュースレター、リーフレット、およびホームページにて発信している。ニュースレター「StepForward」は年数回の発行を継続し、また、本学 AP 事業のホームページについても年間にわたり常に更新を継続している。

なお、ニュースレター、リーフレット、および教育雑誌等に掲載された本学 AP 事業に関する論説等はすべて、それぞれの公表のタイミングに合わせて迅速にホームページのダウンロード欄にまとめている。さらに今年度は、動画サイトに既にアップロードされている本学 AP 事業の説明用ムービー「未来をつくろう」のアドレスを、特にアクセシビリティを優先してトップページにリンクさせた。

(2) 課題

ニュースレター、リーフレット、およびホームページの作成および更新の継続により、本学 AP 事業の取り組みについて多方面からの反響がみられている。平成 31 年度は、達成度自己評価システムのデータの蓄積がさらに進むことなどから、全学的な IR データ分析結果などを踏まえて、より普遍的・客観的な情報発信を行っていきたいと考えている。

C. ベンチマーク等

(1) 概要

本年度は、以下の場において、本学における AP 事業遂行のための情報収集を行った。

情報発信として、本学の AP 事業「学修成果の可視化の取り組み」に関して、静岡理科大学関係者が、6 月 14 日、視察に来校された。

AP 事業での「学修成果の可視化」の導入の経緯（着想のきっかけ、実施までのスケジュール、学内のオーソライズ過程、学内所掌組織、関連する学内制度の変更の有無等）、システムの活用について、実機のデモンストレーションを交えて操作感覚やルーティーン、担当者の作業実感など多岐にわたる内容を視察され、同じ工科大学として大学の施設の見学や、教務上の取り組みについて意見交換を行った。



写真 11-1 静岡理科大学関係者との意見交換



写真 11-2 静岡理科大学関係者の方々

同じく本学における AP 事業の視察、及び意見交換のため AP 事業テーマ V「卒業時における質保証の取組の強化」の選定校の東海大学短期大学部関係者が 10 月 4 日本学視察に来校された。本学とは採択テーマが異なるが、学修成果の可視化と質保証は共通の課題が多く、お互いの取組の成果と課題について意見交換を行った。



写真 11-3 東海大学短期大学部関係者の方々



写真 11-4 東海大学短期大学部関係者との意見交換

本学の AP 事業の取組みに関して、上記のように遠方の大学から視察に来ていただいたことは、本学にとっても大変有意義な情報交換の機会であり、AP 事業の取組み内容が一定程度全国の高等教育関係者の目に留まったことは AP 事業の成果として大きなものであろうと考える。

情報収集

- ① 東京女子大学 AP シンポジウム「教育成果のアセスメントと改革」（2019 年 9 月 3 日 東京女子大学 参加）
- ② 令和元年度 AP テーマⅡ採択校合同あり方検討会（2020 年 2 月 13 日 一橋講堂 参加）

情報発信

- ① 静岡理工科大学関係者による本学の自己評価システム等の視察（6 月 14 日）
- ② 東海短期大学部関係者による本学視察（10 月 4 日来学）
- ③ 新潟工科大学 AP シンポジウム「学修成果のさきに 産学連携教育による人材育成」（3 月 26 日 新型コロナウイルスの流行に伴い中止）

（2）基本的な考え方と取組みの内容

今年度は AP 事業の最終年度となり、同じテーマの大学だけでなく、より多くの取組事例を知るため、関係者が一堂に会するフォーラム等を中心にリサーチした。

その一方で、海外の先進的な取組みや、わが国の工学教育の今後をにらんだ動きにもキャッチアップするため、国内において毎年企画される JABEE 関連講習会、CPD 関連のシンポジウムにもアンテナを張っておき情報を共有することとした。

さらに、情報発信として静岡理工科大学と東海短期大学部関係者が本学の AP 事業取組みに関して興味をいただき、本学にお越しになられ意見交換を実施しお互い情報を共有することができた。

（3）成果と今後に向けた課題

これまで本事業では、AP に関する幅広い情報収集をする目的で、特にテーマを限定せずに様々なシンポジウム等に参加してきた。本事業も終了年度になることから、本事業の方向性や問題点が次第に明らかになりつつある。AP 事業終了後も不断の情報収集に心掛ける。

10. 定量的な数値目標の達成状況

目標	H26	H27	H28	H29	H30		R1	
	実績	実績	実績	実績	目標	実績	目標	実績
1.退学率	2.10%	4.30%	2.40%	2.26%	2.00%	1.80%	2.00%	2.05%
2.プレースメントテストの実施率	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
3.授業満足度アンケートを実施している学生の割合	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
4.上記アンケートにおける授業満足率 (講義/体育実技/実験)	78/87/ 79%	77/80/ 89%	78/80/ 93%	80/90/ 78%	75/85/ 85%	70/92/ 69%	75/90/ 85%	70/87/ 74%
5.学修行動調査の実施率	88.10%	86.50%	84.80%	100%	100%	100%	100%	100%
6.学修到達度調査の実施率	0%	26.90%	51.60%	75.48% (工学科100%)	100%	100%	100%	100%
7.学生の授業外学修時間(週)	6 時間	6.4 時間	7.5 時間	8.25 時間	12 時間	8.3 時間	12 時間	7.5 時間
8.学生の主な就職先への調査	有	有	有	有	有	有	有	有

9.大学教育改革に関する学長裁量予算額 (補助金以外、本事業専用)	92,283 円	2,068,3 94 円	5,000,0 00 円	5,000,0 00 円	3,000,0 00 円	5,000,0 00 円	3,000,0 00 円	5,000,0 00 円
10.事務職員の教育 (AP)コーディネーターへの 委嘱人数	0%	9%	9%	15%	15%	15%	15%	15%
11.ラーニングポートフォリオの学生 利用率	0%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
12.ループ リック評価を実施 した科目 割合(全てのゼミ・実 験科目に 対する割 合)	0%	100%	100%	80%	100%	100%	100%	100%
13.自己評 価のため の企業技 術要素会 への参加 率(1～3年 生)	31%	60%	60%	50%	80%	50%	90%	70%

14.GPAを活用した、学生指導を受けた学生の率	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
15.学修成果の可視化をテーマとしたFDの受講者数(公務出張者を除く)	85%	77%	74%	75%	90%	68% (VTR視聴により100%)	90%	54% (VTR視聴により100%)
16.学修成果の可視化をテーマとしたFSDの受講者数(公務出張者を除く)	教員 85% 職員延べ24名 参加/2回	教員 77% 職員延べ69名 参加/6回	74%	75%	90%	67% (VTR視聴により100%)	90%	54% (VTR視聴により100%)
17.学修成果の可視化をテーマとしたSDの受講者数(公務出張者数を除く)	96%	95%	88%	75%	90%	76% (VTR視聴により100%)	90%	97%

11. AP 組織の改編

(1) 令和元年度の組織体制

令和元年度の本学 AP 事業の組織体制は、原則として前年度の体制を引き継ぐ形とした。すなわち、本学の教育改革加速チームのヘッドメンバーによる月 2 回のミーティングにより、各種施策の進捗管理と新たな企画の立案を継続するスタイルを踏襲した。学生の PDCA サイクルの構築に関わる項目など、学生の助言指導に日々関わっている本学全教員にアナウンスすべき項目については、月 1 回の教授会にて書面を配布するとともに、口頭で伝達することで指示を徹底するとともに事業への理解を求めた。

(2) 発展的な方向性を模索する組織体の発足

一方、令和元年度は、外部コンサルタントと連携しながら、教務学生委員会、および、本学中期計画に基づくいくつかの教務関係のワーキングと有機的連携を強く図る体制作りを進めた。スカイプを用いた月 1 回程度のネットミーティングを継続的に開催し、やや発展的なテーマを議論する柔軟な組織体を立ち上げた。議題の具体例としては、①全学の教員向けワークショップの企画、②基礎学力、人間力の継続的涵養のあり方に関する意見交換と試行企画づくり、③中退予防のための施策に関する意見交換、④科目間連携のあり方に関する意見交換、などである。いずれも中・長期的なミッションを見通すことを念頭に置いたものであり、やや発展的な意見交換をする場として機能した。拙速にイベントを試行するのではなく、本学 IR データの処理と活用の仕方にスポットを当てており、今後本学が継続的に IR を活用しうる体制を時間をかけて作っていく意識づくりに焦点を当てた議論を行った。

III 次年度に向けた計画と展望

令和元年度は、学生の学びの PDCA サイクルをより強固にするとともに、入学前の学生が本学の学びにスムーズに移行できる仕組みを整え施行することに重点を置いた。さらに、本学カリキュラムの運用に関する IR データを活用しながら、特に科目間連携に重きを置いたワークショップなどを通じて教学の PDCA サイクルの構築を進めた。

前者については、①ディプロマ・サプリメントの具現化、②入学前学生の単位認定プログラムの実施、③本学学生への学びに関するヒアリング、および、④高校等への本学の学びに関する情報発信、をすべて実施した。また後者については、①アセスメント・ポリシーに関する本学経営戦略本部との意思疎通の充実、②IR データの活用による教学 PDCA サイクルづくり、を実施した。これらを通じて、本学の 6 年間の AP 事業にて予定していた項目が計画通りひととおり達成されたことになる。

(1) 自己評価システムの活発な活用による学生の「夢・目標」の充実と達成

a. 「学びのガイダンス」の新たな設計と試行

令和元年度より、4月早々の全学年向け「学びのガイダンス」を試行的に開始した。主な内容は、同じく令和元年度より運用の開始された本学「チャレンジアップ制度」の説明や、情報処理技術者試験対策講座の参加案内を中心としたものであった。これらに対する学生からの反応は大きく、既に学内に根付いた感がある。

このことを受けて、令和2年度の「学びのガイダンス」を一新することとして、本学中期計画における担当WGを中心に内容の議論を詰めている。年度初めに、自己評価システム上で実施する「夢・目標」の立案は、学生の学びへの意識向上に大きい感触がある。このことから、学生自身の強みや弱みの客観的把握の試み、および、マインドマップドローイングによる学びの方向性の発見、等の作業を進めさせる企画を立案している。自己の振り返り作業を十分行わせてからの「夢・目標」に変容が見られるか、を見極める。

b. 活動記録の蓄積のディプロマ・サプリメントへの反映と活用

本学ディプロマ・サプリメントは、令和元年度中に、自己評価システムに入力されている情報をグラフ化するなどにより、PDF形式の資料として取り出せるしくみとして構築された。本学「工学ゼミ」における助言教員との面談などの場で、出力に基づいて学生と議論をする助言教員もみられるなど、積極的活用に向けた試行が進みつつある。

次に課題となる点として、学生の活動記録としての日常的活用、および、助言教員による学生への情報提供のプラットフォームとしての活用、が課題と認識している。前者は「学びのガイダンス」におけるマインドマップや対話型企業技術・要素会の振り返りシートなどを蓄積して、次の戦略を練る上での資料として活用させるイメージであるが、各種PDF資料を学生側がアップロードできる仕組みにするなどの技術的課題がある。後者はより多くの教員による使用率のアップが課題であることを認識しており、本学の学系やコースにおける議論のベースとするなど、組織的な利用体制を作ることを意識したい。

(2) 本学のアセスメント・ポリシーの機能化

a. 「マップ分析」を基軸としたカリキュラム改善のPDCAサイクルの構築

令和元年度は、カリキュラムマップ上の全科目について、学生の感じた「達成感」をマップ化した「マップ分析」を行うことで、学生の学びにおける躓きポイントを明確にする取り組みを進めた。さらに教員ワークショップで情報を共有し、学系やコースごとに改善策を話し合うワークショップを実施した。

「マップ分析」の手法とその意義が学内に共有されたことを受けて、令和2年度以降では組織的活用のあり方を模索する。APチームによるワークショップから学系やコースの月例会議などに議論の場をシフトさせたり、毎年度末に実施されるシラバス執筆と点検の場に活用してもらうなど、授業FDやカリキュラム・ポリシーに関するPDCAサイクルでの活用のフェーズに移行させる。

b. 本学卒業生および地元企業と連携したアセスメント体制づくり

本学のアドミッション・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに比べ、工学科のディプロマ・ポリシーの客観評価は十分ではない。本学が旧4学科の体制から現工学科の体制に移行してから令和2年度で6年目となり卒業生が2期輩出できたこと、および、本学在学生全員を対象とした「対話型

企業技術・要素会」を実施するようになってから数年が経過していること、などによって、工学科の卒業生や地元企業が本学工学科の学びをどのように評価しているかに関する実質的なデータがようやく収集できる体制が整いつつある状況である。

このことを受けて、本学は令和2年度より新潟県補助金事業として「コトづくり実践教育を通じた地域中核技術者の育成と県内定着事業」をスタートさせた。地元企業と密に連携したインターンシップ事業の発展的取り組みや共同研究体制の充実を図ろうとするものである。本学卒業生に期待いただいている地元企業からの声を学びのしくみのアセスメントに生かす機会ととらえ、本学自己点検・自己評価委員会などにより継続的に議論していく方向で学内調整を進めている。

発行日：令和 2 年 3 月 30 日

発行人：平成 26 年度大学教育再生加速プログラム

新潟工科大学 AP チーム（教育改革加速チーム）

新潟県柏崎市藤橋 1719 番地

Web: https://www.niit.ac.jp/ap_business/

